

創刊準備号

2005(平成17)年3月1日発行

Buddhist Music — News Letter

佛教音樂

ニューズレター

機関誌『佛教音楽』は、2005年4月より 仏教音楽・儀礼に関わるみなさんの情報紙 『佛教音楽 ニューズレター』としてスタートします

- ■特集 どうなる? どこへゆく? 仏教音楽 佐々木 正典×前田 正樹×福本 康之
- ■交流のひろば ― 勤式・仏教音楽研究所の活動
- ■クローズアップ ― 演奏会レポート
- ■コラム ― 本願寺仏教音楽・儀礼研究所に期待する!
- ■研究所だより 研究員・研究生の紹介
- ■お知らせ 書評/CD紹介/記事募集 ほか

労士真宗本願寺派 教学伝道研究センター勤式・仏教音楽研究所

〒600-8399 京都市下京区堀川通正面下ル TEL.075 (371) 9244 FAX.075 (371) 5761

http://www2.hongwanji.or.jp/ongaku/

掲載記事•情報募集中!







どうなる? どこへゆく? 仏教音楽

佐々木 正典 × 前田 正樹 × 福本 康之

機関誌『佛教音楽』は、このたび季刊『佛教音楽ニューズレター』として新たにスタートすることになりました。それに伴い紙面も、仏教讃歌を歌う合唱団や、一般寺院と門信徒の音楽・儀礼を通した活動を支援し、情報を交換する場へとリニューアルいたします。

創刊準備号となる今回は「どうなる? どこへゆく? 仏教音楽」と題して、勤式・仏教音楽研究所がめざす方向について、常任研究員3名の鼎談をお届けいたします。

感性の時代の到来 ―― 宗教儀礼としての音楽

福本: 早速ですが、前田研究員より興味深い報告があると 伺っておりますので、お聞かせいただきましょう。

前田: 先般行われました第274回定期宗会での議決を受けて、この4月から勤式・仏教音楽研究所が「本願寺仏教音楽・儀礼研究所(以下『仏音研』)」として新たなスタートを切ることになりました。

福本: その意味するところは何でしょう?

前田: 新しい名称に、仏教音楽と儀礼が併記されているように、仏教音楽は、単なる伝道の手段としてだけではなく、儀礼的な側面からも考えていかねばならない、というのが宗門のスタンスでしょう。今まで以上に仏教音楽が重要な意味をもつようになる、つまり「仏教音楽の独り立ち」が求められていると理解してよいでしょう。

佐々木: 私も同感です。『宗報』11·12月合併号(2004年) の対談(→P3囲み記事参照)で述べましたように、21世紀は「感性の時代」になるでしょう。宗教においてもこの流れは無視できない、そう判断されたのだと思います。

福本: つまり、ご門主のいわれる「感性の宗教の時代」(『中央公論』 2001年1月号) が到来したと。

佐々木: そうです。これからは、感性に訴えかけることなくして宗教はありえません。そこで重要になるのが儀礼なんです。

本願寺のすすむ道 ―― 仏教音楽と儀礼の本山として

福本: ではこうした時代に、仏音研ではどのような方針で、 具体的に何をやっていくのか、ここでは音楽の事例 に即して、お話いただきましょう。

前田: まずは、本願寺のすすむべき道について。これには、 二つの重要な要素があります。ひとつは「規範」として、そしてもうひとつは「カリスマ」としての本願寺です。

福本: つまり宗門全寺院に対してのお手本を示さねばならないという側面と、本願寺だからこそ可能で、他の追随を許さない存在でなければならないという側面ですね。

佐々木:明治以降、儀礼という分野において、特に「カリスマ」 としての側面が失われつつあります。この部分をい かに充実させるかですね。

福本: そのポイントは何でしょうか。

前田: 「カリスマ」なんですから、まず何をおいても、本願寺にお参りくださる門信徒の方々に、いかに喜んでいただくか、そして「もう一度お参りしたいなぁ」と思っていただけるか、でしょう。誰のための本願寺かを考えれば、至極当然のことです。

福本: 音楽でいえば、群を抜いて大規模な「御堂演奏会」や レヴェルの高い「御正忌報恩講奉讃演奏会」を主催 する本願寺が、これにあたりますね。

前田: そうです。こうした宗教イヴェントを、質と量ともに充 実させる方向で考えています。つまり「本願寺で最 高の音楽を聴く喜び」や「本願寺で一緒に歌うことの 喜び」の充実です。



佐々木: 御堂演奏会は、毎年秋の法要の一環として行われるのですが、本願寺の法要はこれだけではありません。各法要ごとに、できるだけ多くの門信徒の方々の歌声が響いてほしいものです。というのも、御堂演奏会は単なるイヴェントではなく、歌(音楽)による門信徒の報恩感謝の儀礼なんですから。

前田: 今日、音楽のジャンルは非常に多岐にわたっています。 ですから、単に回数を増やすだけではなく、いろんな 音楽を、できれば各種の芸能にまで視野を広げて行 うことができれば、と考えています。

佐々木:明治以前の本願寺では、それこそ日本各地から最高の芸能が奉納・上演されていたんです。しかも節談説教をはじめとして、そのいずれもが仏教的な味わいに満ちていたんです。だからこそ、門信徒の方々が「本願寺詣で」に満足して帰っていかれたんですよ。

福本: めざすは、「総合劇場本願寺」の再興ですね。

佐々木:もうひとつ。本願寺の儀礼が一般寺院のお手本となっているという意味では、「規範」としての本願寺は機能しています。しかし、これからも「規範」たり得る

ためには、現代人の感性と生活スタイルにあった儀礼システムを創らねばなりません。

福本: 例えば、洋楽や洋装を用いた儀礼を、現代的な建築 様式をもった儀礼堂で行うということ。24時間いつ でも靴を履いたままお参りできる儀礼空間の整備な どでしょう。

前田: 宗教が、感性や生活スタイルと乖離してしまうと、それは「絵に描いた餅」にしかなりません。いかに美味しいお餅を食べていただくかを考えていかなければなりません。



音楽に満ち、人のあふれるお寺をめざして

福本: さて、ここまで読まれている方々、特にご住職方は、「じゃぁ、うちのお寺はどうすればいいんだ?」と思われていることでしょう。 続いては、そのあたりについてお話いただきましょう。

前田: ご住職としては、やはり「人々の集うお寺」にしたい と望んでおられることでしょう。

福本: この点については、ご本山同様、一般寺院でも、仏教音楽が一層重要になってくるでしょう。

前田: そうですね。『宗報』の8月号(2004年)でも述べましたように、これからの活動としては、「仏教讃歌合唱活動」も有効だと考えています。この活動の最も重要な点は、「受け身型」ではなく、「参加型」という点にあります。

佐々木: たしかに、御堂演奏会に来られる合唱団の方々のパワーを目の当たりにすると、合唱が一番でしょうね。 喜んで「参加」してくださっているわけですから。

福本: ただ、これを各お寺で行なうとなると、特に音楽を得意としないご住職さんには、大変ではないでしょうか。

前田: 提案させていただくからには、もちろん対策があります。さまざまな事例を分析し、合唱団の結成から運営までの『マニュアル』を作成する予定です。

福本: さらに各組や教区単位での合同演奏会など、横のつながりを持った活動となると良いですね。そうすれば、人材の発掘や教区のスターが生まれるなど、地域に密着した「仏教讃歌合唱活動」になるわけですから。そのためにも、このニューズレターが、そうした情報交換のお手伝いの場となれば嬉しい限りです。

前田: それと、実際に歌う曲についてなんですが、どうも仏教讃歌は暗いというイメージがあるようです。 仏音研では、これからドンドン新しい作品を、それも皆さんが歌いたい! と思えるようなものをお届けしていきますので、どうぞ、ご期待ください!

福本: そのひとつが、今回発表になった新曲の《念仏》ですね(ニューズレターの最終ページをご覧ください)。

佐々木: 私から、もう一つだけ少しヤカマしいことをいわせてください。 寺院での合唱団活動は、本願寺での場合と同じく、宗教活動の一環であることを忘れないようにしていただかなくてはなりません。 レクリエーションとして楽しむことも大事ですが、やはり本分は、合唱団としてお寺の法要にも「参拝」していただくことにあるのですから。

ひろがれ! 仏教音楽の輪

前田: ご住職をはじめお寺や教区の方々、そしてご門徒の方々にも、ご協力いただくことになると思います。そして、その先にある喜びに向って、ともに手をとりあって進んでゆくことができればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

佐々木: 私からも一つお願いを。ご住職は、いわばお寺という 現場を預かるプロデューサです。そして合唱団の方々 は、法要や演奏会でのプレイヤーですから、是非とも 「現場の声」を仏音研までお寄せいただければと思 います。

福本: 親鸞聖人750回大遠忌法要には、本願寺そして全国 のお寺で、是非とも仏教讃歌が高らかに鳴り響いて ほしいものです。本日はどうもありがとうございました。

『宗報』 2004 (平成 16)年11・12月合併号 クローズアップ・サンガに 出口総務と佐々木常任研究員の対談掲載!

全寺院に向けてお届けしている『宗報』11・12月号において、出口湛龍総務(勤式・仏教音楽研究所所管)と佐々木正典常任研究員による「対談=現代にふさわしい本願寺儀礼の構築へ『儀礼・仏教音楽への期待』」が掲載されました。

対談では、仏教音楽や儀礼への関心が高まるなか、その背景にあるのは「感性の時代の到来」である、という佐々木研究員の分析を受け、出口総務から、仏教音楽と研究所に課せられた役割が、これからの本願寺にとっていかに重要であるか、という期待のお言葉をいただきました。 掲載内容は以下の通りです。

★感性の宗教の時代へ *感じることの大切さ *儀礼の宗教へ

★本願寺の進む道 *儀礼における伝統と革新

*門信徒の参加

*文化の発信基地としての本願寺

★人の集うお寺をめざして *音楽を通しての参加

*人びとの心に響く仏教音楽

新しくなった研究所が、どこに向かって、何をしようとしているのか。『宗報』11・12月号の対談を、ぜひご一読ください。



本願寺の未来について語り合う出口総務(左)と佐々木常任研究員



今回は「勤式・仏教音楽研究所」の活動を紹介させていただきました。 次回からは、皆さまから寄せられた情報を中心に掲載してまいります。 演奏会の記録や、寺院での仏教音楽活動などの情報をお寄せ下さい。

「山古志村仮設住宅」訪問演奏会

2004年12月31日 新潟県長岡市陽光台仮設住宅

三ヶ地区集会所

2004年も押しせまった12月31日、新潟県中越地震で被災された方々を励ます訪問演奏会を行なってきました。

この演奏会は、復興への思いを込めたメッセージをドラム缶に書いていただき、除夜の鐘として鳴らそうと呼び掛けられたイベント『希望の鐘』に参加させていただいたものです。御正忌報恩講奉讃演奏会でもお馴染みのオペラ歌手 浅井順子さん(ソプラノ)とともに、花月真常任研究員(パス)、山本有希子常任研究員(ピアノ)の演奏をお聴きいただきました。

新曲の《念仏》をはじめ《みめぐみの》《やさしさにであったら》 《ありがとう》などの仏教讃歌、そしてオペラアリアや《故郷のうたメドレー》を心を込めて演奏させていただきました。被災された方々が涙ながらに聴いておられる姿を見るにつけ、いつの日か、再興なった山古志村でもう一度歌を聴いていただきたいと思いました。



「希望の鐘」に思いを込めて

司会:鹿多証道さん

山古志村の長島村長に再訪をお約束 総御堂前に集合する参加者

御堂演奏会2004

2004年11月22日·23日 西本願寺総御堂

恒例となった「御堂演奏会」に、 今年も全国各地からご参加いただき



年々増加する男声参加者

ありがとうございました。ご参拝のみなさま方に、そして参加者の 方々に「仏教讃歌」の素晴らしさを感動をもって体感していただけ たと思いました。

出演者は年々増加の一途をたどり、今年は両日をあわせて、101団体、約1200名の方が参加されました。定員800名としてお申し込みを受付けしたため、一時は400名程度の方にお断りをしなければならないと危惧しました。しかしご本山にお参りいただき、仏教讃歌を御堂にて歌う喜びを共にしたいというお心を何より大切にしなければならないという思いに立ち返り、すべての方にご参加いただけるよう準備を整えることができました。今後はさらに参加者が増える場合を想定して、春・秋2回の開催も視野に入れて計画をすすめてまいります。

今年は、ひな壇を設置し、より歌いやすく、ご参拝の皆さまがたにも観やすいよう配慮をし、さらに音響システムもレベルアップしてお聴きいただきました。





歌唱指導

御正忌報恩講奉讃演奏会

2005年1月15日 本願寺会館大ホール

恒例の『御正忌報恩講奉讃演奏会』が本願寺会館大ホールで開催されました。当日はあいにくの冷たい雨にもかかわらず、急きょ補助席を設置す

るほどの大盛況ぶりで、用意した800部のプログラムも、足りなくなってしまいました。「仏教讃歌」がこれほどまでに支持されて



気づけられた思いです。 日頃、京阪神や滋 賀県で合唱をされて いる方々、そして龍 谷大学男声合唱団の 諸君が、拡大版の「本

いることに改めて勇

願寺合唱団」に合流し、本当に美しいハーモニーを聴かせていただきました。より多くの方が自由に参加でき、より充実した演奏活動を行える団体へと「本願寺合唱団」が発展できるよう努めていく必要を感じました。

浅井順子さん、花月真常任研究員の熱演は、この日は殊に素晴らしく、言葉のひとつひとつが心に届き、そして広がり、み仏のお慈悲に包まれている幸せを身をもって体験することができました。 メ







№ピアノはひたむきで清澄な響きを 奏でる丸山千晶先生と、彩り豊かで ダイナミックなパフォーマンスで魅 せる山本有希子常任研究員。仏教音 楽は演奏する人の個性がそれぞれ自

由に発揮され、そして、阿弥陀さまの音楽を演奏する喜びをもって望むことこそが重要なのだと気づかされました。作曲者の森琢麿さんの自演、オーボエの波々伯部宏彦さん、オルガンの秋元裕美子さんが加わり、満場の観客とともに高らかに歌い上げられた新曲《念仏》の「なもあみだぶつ」はまさに感動的。

今後は本山のみならず、各教区での演奏会も企画し、より多くの方々に仏教音楽の生の演奏に触れていただきたいと考えています。 みなさん、私たちとともに《念仏》を大きな声で歌いましょう。





このページでは、みなさんのコンサート情報や、他宗派のお寺での活動について カラー写真とともにご紹介いたします。様々な情報をお寄せください。 今回は、浄土宗と法相宗での仏教音楽活動についてレポートします。

第7回 『菩提樹』 チャリティーコンサート

2004年7月25日 净土宗徳興山建中寺

山本 有希子

勤式·仏教音楽研究所 常任研究員

2004年7月25日17時30分、浄土宗徳興山建中寺(名古屋市 有形文化財・重要文化財) の経蔵保存修理完成に合わせて、境内特 設ステージにて「第7回『菩提樹』チャリティーコンサート」が開 催されました。プロデューサーは真宗大谷派の前田美子さん。ゲス トには本願寺派の歌手が出演するなど、仏教各宗派から有志が集い ました。広い境内は満席、屋台も数多く並んでいます。

> * * *

第一部は「奉祝・献供」と題し仏教讃歌が7曲演奏されました。 歌手は松波千津子・澤脇達晴・花月真の各氏。それぞれ国内外で活 躍している実力派の歌手だけあって聴きごたえ十分のステージでし た。本派にて制作された新曲《念仏》(森琢磨曲・山本有希子詞) も演奏されました。

第二部「奉祝~メッセージ~」では、落語や盆踊り、山車・から くり・お囃子と楽しい出しものが行われました。

そして日も沈みかけた頃、第3部「奉祝〜仏伝〜」が開始。住職 の献灯に続き松明が灯され、厳粛な雰囲気に変わった中、四世野村 小三郎が今回のためにアレンジを加えたオリジナル狂言『宗論』が 始まりました。野村又三郎と小三郎の掛け合いが実に見事で会場は 盛り上がりました。山車「神皇車」に150個もの提灯が揺れ、経 蔵がライトアップされ夢のように幽玄な空間が演出されます。

舟木淳の語り『三蔵法師』がインド、中国、日本などの民族楽器 の調べにのってはじまりました。続いて児童合唱による《仏伝の国々 のうた》計7曲が民族楽器とピアノに合わせて演奏されました。

そして最後のステージ、松下真一作曲混声合唱曲《カンタータ念 仏》が、100名を超える合唱で高らかに歌い上げられました。ス テージから音の波が押し寄せてくるかのような迫力は圧巻。3時間 半にも及ぶコンサートの大団円です。



薬師寺『最勝会』復興上演

2004年4月19日 フェスティバルホール

山口 篤子

勤式·仏教音楽研究所 研究生

16世紀以降途絶えていた奈良・薬師寺の最勝会が、一昨年、約 500年振りに復興されました。この法会では『金光明最勝王経』 についての講義や論議、問答が、本来7日間にわたって行われるの ですが、今回の上演は約2時間のダイジェストでした。

復興上演のポイントはふたつ。ひとつは、仏教学・音楽学・美術 史学の専門家たちによって、かつて法会で用いられた仏画や装束、 声明の旋律が復元されたこと。最勝会のかつての姿を彷彿とさせま した。もうひとつは、最勝会では本来奏されない器楽が新たに創作・ 演奏されたことです。作曲を担当した猿谷紀郎氏は、『金光明最勝 王経』で懺悔の象徴として説かれる「金鼓」や、供養として捧げる との記述がある音楽を、雅楽(伶楽舎)と打楽器(山口泰範)で実 現しようとしました。

最勝会の復興上演は「伝統と創造の調和を目指すという企画の意 図を十分に伝え」「法会の魅力を十分に伝えた」ことが評価され、 文化庁芸術祭大賞(平成15年度・音楽部門)を受賞しました。また、 500年もの長きにわたって失われていたものが復興されたのは、 たいへん意義深いことです。

しかし、復興上演にとって、猿谷氏の極めて西洋的で現代的な新 しい音楽が本当に必要だったのでしょうか。雅楽や声明としっくり 馴染み難く、儀礼全体にもそぐわないように感じられたことは否め ません。

伝統文化の復興において、「伝統と創造の調和」が課題となるこ とは珍しくありません。しかし調和は、いついかなるときも必要な のでしょうか? 伝統だけでは不十分なのでしょうか? 伝統的な 仏教儀礼の復興において求められるべきものは何なのか、改めて考 えさせられる公演でした。

■「交流のひろば」「クローズアップ」登場人物&団体の募集

本紙「交流のひろば」「クローズアップ」のページでは、仏教音楽の分 野で活躍する人や団体を紹介していきたいと考えています。ユニーク な活動を展開する方や、長年熱心に取り組んでいらっしゃる方、「うち の合唱団のスター」などなど、みなさんの周りで活躍されている人を ご紹介ください。

また、『仏教讃歌』への思いなどをつづったエッセー、仏音研へのメッ セージ、ご意見などもお待ちしています。

本紙記載の電話番号、ファクス番号まで、お気軽にお寄せ下さい。



予告

■次号創刊号の「交流のひろば」は、 大阪教区・兵庫教区・東京教区・北海道教区・ハワイ教区の 合唱団などを紹介する予定です

※ハワイ教区では、2006年9月に「仏教婦人連盟世界大会」が開催 されます。仏音研では、本紙を通じて、皆さまにご参加を呼び掛けよう と計画しています。世界の人々とともに、ハワイにおいて、仏教讃歌の 大合唱を響かせようではありませんか! 詳しくは次号以降にて…



このコーナーでは、「勤式・仏教音楽研究所」の活動内容や、研究報告を掲載します。 今回は研究員・研究生のプロフィールをご紹介します。 この顔にピンときたら・・・お気軽にお声がけください。

佐々木 正典

堂任研究員 総合ディレクション部

■メッセージ

もしもこの世に音楽がな かったら、人間は文明社 会をつくれなかったであ ろう。もしも仏教にお念 仏(わが名を称えてくれ



よの親心)がなかったら、法然聖人も親鸞聖人も 残らず、浄土真宗は顕れなかったであろう。仏教 音楽とは如来大悲の仏心が音楽となって響流する 大信心海で、あらゆるジャンルで奏でる事の出来 る宇宙大の讃歌です。我々はあらゆるジャンルの 楽友の参加をお待ちしております。

■プロフィール

日曜学校:仏教青年会では仏教讃歌で育てられ、 龍大在学中、上村けい先生の情熱的講義を受く。 29歳で得度、1984(昭和59)年 『佛教音楽』 第 9号座談会「浄土の音楽をたずねて」以来、「浄土 の音楽」より「儀礼奉還」まで連載。ポスト・モダン 教学を提唱、宗門現場の教学に儀礼論のないこと を発見。以後宗門イノヴェーションのために、儀礼《リ チュアル (たしなみ)・セレモニー (儀式)・フェス ティヴァル(祝祭)》、文化、仏教音楽の宗門で実現 可能な具体的な作業に携わっている。

前田 正樹

常任研究員 プロデュース部

■メッセージ

仏教音楽研究所に関わっ てもう10年以上経ちま した。やっと宗門内でも その重要性を認めていた だくようになりほんとうに



喜んでいます。今後100年~300年の本願寺を 見据え、全国各地を巡って合唱団、一般寺院の声 を聞きながら活動を続けていきたいと考えていま す。どうかお気軽にお便りをお寄せください。

■プロフィール

宗教哲学を志して京都大学文学部に入学するも、 突如「生きてあること」の輝きを求めて舞踊を始 めドロップアウト。その後 "形而上学的ダンサ として各地でソロ活動を行なう他、美術分野でも 活躍。新作狂言の台本をはじめ、《フィガロの結婚》 を全編京都弁で翻案した《鳥獣戯画版フィガロの 結婚どすえ》の台本を手掛ける等、ユニークな活 動が多い。オペラ演出・舞台出演・映像監督・イベ ントプロデュース·CM·総合企画制作など幅広い 活動を続けるマルチタレントである。

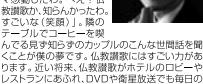
ちょっと若く見えるかもしれませんが、いつの間に か50歳になってしまっていました。

花月真

常任研究員 演奏·普及部

■メッセージ

「ええウタやなあ・・・ホン マ感動したわ。へえ!仏 教讃歌か、知らんかったわ。 すごいな(笑顔)」。隣の



■プロフィール

輝かしくも重厚な歌声と幅広い表現力を持つ本格 派バス歌手。オペラでは、《ドンカルロ》《ボリスゴ ドノフ》《パルジファル》《マクベス》《ボエーム》《ル チア》《フィガロの結婚》《魔笛》《ドンジョバン二》 《カルメン》《天守物語》《満仲》《椿姫》など数多 くの公演で主役を演じ絶賛を博した。コンサート 出演も数多く国内外で高い評価を得ている。各種 コンクール優勝入選多数。関西二期会正会員及び

ように流れる日が来ますよ。自信あり!

大谷 千正

常任研究員 創作部

■メッセージ

研究所で制作スタッフと してお手伝いさせて頂く ようになっていつの間に やら6年を過ぎようとし ています。この間、もっぱ

ら花月真さんの素晴らしい声のために曲を書き続 けてきましたが、振り返ってみると、色々な思い出 とともに、曲数も20曲近くにのぼっているようです。 とりわけ《カンタータ歎異抄》は、彼の声のイメ-ジが作品を成立させたと言っても過言ではないで しょう…。優れた演奏家との出会いがあって作品 が生み出されるということは、音楽史上、よくある ことなのですが、彼と出会えたことは幸せなこと だと思っています・・・。

■プロフィール

パリのエコール・ノルマル、ルエイユ国立音楽院卒 業。A. ジョリベ賞、SACEM作曲賞受賞。 1988年 にはソルボンヌ大学で博士号を取得。これまでパ リ大学、相愛大学、立命館大学、広島音楽高校などで教鞭を執る。フランス・フォーレ協会、JASRAC、日本作曲家協議会等会員。歌曲、ピアノ曲、室内楽 作品のほか、管弦楽曲としては《Vn.Vc.Orc.の為 の協奏曲》、《カンタータ歎異抄》など。

福本 康之

常任研究員 調查·研究部

■メッセージ

「仏教音楽を歌うことの 意味は?」「仏教音楽って なんでしょう?」仏教音楽 の研究を仕事としている ため、こんな風によく訊

ねられます。でも実は、ムズカシイんですよね、こ の問いに答えるのって。答えは・・・歌ってらっしゃ る皆さんが一番良くわかっているのかも!?と思う 今日この頃です。理屈屋の私がいうのも何なので すが、考えるよりも、まずは歌いましょう!それが 仏教音楽を楽しむ何よりの方法だと思いますよ!

兵庫県伊丹市の寺院に生まれ、幼少の頃より音楽 に親しむ。慶應義塾大学および国立音楽大学、大 阪大学大学院にて音楽学を専攻。専門は、西洋音 楽史および近代日本文化論(近代仏教文化など)。 主要著作・論文に『ベートーヴェン全集』(講談社: 共著)、「仏教界における初期洋楽受容――洋楽 の位置付けを中心に」(大阪大学大学院『阪大音楽学報』第2号)など。その他CD解説や評論、ラ ジオ解説などの啓蒙活動にもつとめる。

山本 有希子

常任研究員 演奏·普及部/創作部

■メッセージ

皆さんこんにちは!毎日 楽しく過ごしてますか? 毎日を楽しく過ごす・・・な んて簡単なようで難しい ですよねぇ。そこで日々

の暮らしのエッセンスとして「仏教音楽」に触れて みるのはいかがでしょうか?大きな声で歌ってみ たり好きな曲を聴いたり弾いてみたり…。私は仏 教音楽を通じて喜んだり感激したり沢山の感動を 味わい生活を送ることが出来ました。

素敵な感動とともに皆さまと一緒にふれ合える機 会を沢山つくっていきたいと考えています。歌を うたうことは健康にも美容にもいいそうです。共 に頑張りましょうね。

■プロフィール

ロマン派(ショパン、シューマン)、フランス近代(ド ビュッシー、ラヴェル)音楽を得意とするピアニスト。 ソリストとして活躍する一方、声楽、器楽伴奏の専門家として各種演奏会に活躍。 華麗なる技術と素 晴らしい芸術的直感に高い評価がある。作曲、作 詞にも取り組んでおり、《NAMO》《風にむかって》 《念仏》等、新曲作品も手がけている。

本願寺仏教音楽・儀礼研究所に 期待する!





1962 (昭和37) 年に仏教音楽研究委員会が発足し、仏教音楽の研 究及び勤式の現代化に関する事項の調査審議が始まりました。新しい 仏教音楽と伝統的な仏教音楽の研究、学校行事の音楽について、聖歌 集の編纂など、当初から充実した内容の委員会であったと思われます。 その中でも特筆すべきは音楽法要『宗祖降誕奉讃法要』の制作・制定 ですが、現在も降誕会にて厳粛におつとめされています。1974(昭 和49)年、さらに専門的音楽知識と技術の必要性、伝道としての普及 活動を目的に置いて組織作りをした、仏教音楽研究所が設立されまし た。CD制作、オルガン楽譜出版、御堂演奏会楽譜出版・練習用CD、曲 目解説書、ほとけのこどものうた楽譜出版、聖典聖歌の編纂協力など 多数の事業を行いましたが、さらなる研究体制が必要になったと思わ





いまこうじ さとこ **今小路 聡子**

研究生(演奏・普及部)

■メッヤージ

高校時代、ある友人が恩徳讃をハードロック風やラップ風に歌っていて大笑いした記憶があります。 不謹慎な、と思われる方がいりっしゃるかもしれま



せんが、さまざまな世代に受け入れられることが 仏教音楽に求められるのだと思います。世代や時 代を超えて歌われる仏教讃歌の普及に少しでも お役に立てれば、と思います。さあ、皆さんご一緒 に歌いましょう!

■プロフィール

ミュンヘン五輪年の2月29日、京都生まれ。本願寺中央幼稚園から京都女子大学附属小学校、京都女子中・高等学校へと進学、恩徳讃を口ずさむ毎日を送る。小学校の卒業文集には「フルート奏者になること」を夢として書いたが、声楽の楽しさに出会い京都市立芸術大学へ進み、同大学院音楽研究科声楽専攻修了。1999年から2002年までフィレンツェへ留学。帰国後、歌曲を中心に演奏活動を行っている。

大谷 祥子

研究生(創作部)

■メッセージ

こんにちは、研究生の大谷祥子です。大学の授業で「仏教讃歌」を歌ったとき、なんてきれいなハーモニーなんだろう!と感じました。みなさんに



あらした。めんこんに もこの感動を味わっていただけたら、と思ってい ます。難しいことは考えずに、歌って音楽を楽しみ ましょう!

■プロフィール

小さい頃はおてんばで傷だらけになって遊んでいたわたしが、ピアノを始めてすっと続けるなんて、親戚中の誰も想像しなかったそうです。小学校の頃はトランペットを吹いたりもしましたが、やはりピアノが好きで相愛大学ピアノ等攻に進みました。現在、当研究所研究生、相愛大学声楽科演奏助手。

ご協力いただいております。

大正4年、富山県生まれの仏教音楽研究家。「仏教

音楽コレクション·A」主宰。主著に『それは仏教唱

会福祉法人·中田保育園理事長。財団法人国際仏

オペラ歌手。関西二期会理事長や日本演奏連盟理

事など日本音楽界の要職を歴任。その多くの功績

に対し、ヤナーチェク・メダルや大阪文化祭賞など

一戦前仏教洋楽事情』など。社

飛鳥 寛栗 客員研究員

教文化協会理事。善興寺前住職。

木川田 誠 客員研究員

多数受賞。元相愛大学教授。

歌から始まった一

村上 智仁

研究生(調査·研究部)

■メッセージ

みなさんこんにちは! 研究生の村上です。私は お寺に生を受け、小さい ころから友人たちの間で "寺ぼっち"と呼ばれ、仏 教讃歌に親しみ、父につ



いて今ひとつ解らないながらもお経を読誦していました。そして成長した "寺ぼっち" は、趣味が昂じて勤式・仏教音楽研究所の研究生となり仏教音楽の研究にいるとしんでおります。幼い日々に出会った仏教音楽の喜び・・・みなさんも、お子さんやお孫さんと一緒に、仏教讃歌を歌いましょう!

■プロフィール

一本は、仏教讃歌と声明を中心としたリサイタル活動を行う父の影響を強く受けて育ちました。龍谷大学大学院に進学後、真宗学を専攻し、特に音楽を通しての宗教理解を柱に研究を進めてきました。今年度、勤式・仏教音楽の研究氏研究所ととなり、併せて勤式指導所の研究生課程にも在籍しています。仏教音楽と勤式にどっぷりとつかった毎日です。

やまぐち あつこ 山口 篤子

研究生(調査・研究部)

■メッセージ

本は合唱大好き人間です。 昔は勉強そっちのけで毎 日歌ってばかりいて、よく 叱られました。このニュ ーズレターを通して、み なさんに仏教音楽と合唱



を楽しんでいただくお手伝いができれば、とても 嬉しいです。

■プロフィール

鹿児島県生まれ。大阪大学卒業、同大学院文学研究科博士前期課程修了(音楽学)。音楽の教諭である母の影響で、幼い頃から音楽に親しむ。高校から合唱を始め、大学進学後は大阪大学混声合唱団に在籍。現在も一般合唱団に所属しながら、日本における合唱活動の歴史を主なテーマとして研究を続けている。現在、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在学中。

東京藝術大学音楽学部作曲科卒業の作曲家。主要作品に《シンフォニア》、《和讃による「報恩講法要」》、主要著作に『和声法演習』など。元相愛大学教授・同音楽学部長。

小野 真 委託研究員

京都大学文学研究科博士後期課程修了、京都大学博士(文学)。宗教哲学者として大阪外国語大学や中央仏教学院等で講師を務める一方で、雅楽の専門家としても、積極的な活動を展開し、勤式指導所や天王寺楽所雅亮会雅楽練習所の講師をつとめる。

主要著作・論文に『ハイデッガー研究――死と言葉の思索』(2002年、京都大学出版会、日本宗教学会賞受賞)など。

平成17年4月から 『本願寺仏教音楽・儀礼研究所』 スタート!

2004年11月2日に発布された宗則第14号「教学伝道研究センター設置規定」、及びその後に定められた宗達により、「勤式・仏教音楽研究所」は、より大きな期待を担って「本願寺仏教音楽・儀礼研究所」として新たにスタートします。

当研究所では、総長から任命される「本願寺仏教音楽・儀礼研究所」新所長のもと、「総合研究部門」と「普及部門」が設置され、研究体制が一層充実されます。

「総合研究部門」では、仏教音楽のみならず、声明・伝統法要などあらゆる意味での儀礼を総合的に研究し、新しい時代にふさわしい仏教音楽、儀礼に関する提言を行ない、様々な企画・立案からプロデュースまでを行なってまいります。

「普及部門」では、これまで以上に演奏活動の充実を行なうのみならず、仏教讃歌や法要音楽の創作活動を行ない、寺院活動の新しいスタイルの提案を行なってまいります。

【仏教音楽】【儀礼】【文化】をキーワードに、全国各地でフィールドワークをしながら、積極的な演奏・普及活動を行ない、新しい本願寺の未来を創造してまいります。どうか皆さまからも様々な現場のご意見をお聞かせくださいますようお願いいたします。

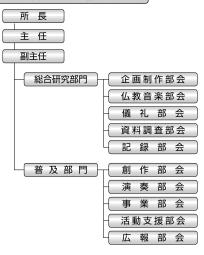
★現行体制

勤式・仏教音楽研究所



★新体制(案)

本願寺仏教音楽・儀礼研究所



れます。2003 (平成15) 年より勤式・仏教音楽研究所となり組織体制も一新しましたが、この度、本願寺仏教音楽・儀礼研究所となります。 当研究所は、仏教音楽の本質を探る、また儀礼としての仏教音楽の確立を目指す画期的な研究機関になることと思います。

「伝統とは、伝承のみではない。発展のない伝統は伝統とはいえない」といった方がおられましたが、今日のわが宗門においても同様のことが言えるのではないでしょうか。現在、保育園(所)、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、短期大学、大学と龍谷総合学園24学園を含め多くの児童、生徒、学生により仏教讃歌は歌われています。歌詞を含め生徒たちに内容理解が容易な仏教音楽、音楽法要の誕生を望んでやみません。また、複雑多岐に渡っている現代社会の中にあって、人々は心

の癒しを、また信じることを求めています。感性に訴える音楽、言葉では表現することのできない音楽を人々たちは理解できるのです。 仏 さまにみまもられ安心して成長できるよう、 仏教音楽を奏でて下さる ことを期待いたします。

■プロフィール

大分県立芸術文化短期大学付属緑丘高等学校音楽科ピアノ専攻卒業の後、相愛大学音楽学部において作曲法、音楽学を専攻し、音楽を芸術として、また学問として学ぶ。仏教音楽研究所評議員を歴任し、各地の仏教行事の大会出演、研修会講演、龍谷総合学園宗教教育研究会助言講師、合唱指揮・指導、宗門関係学校校歌作曲をする。九州で御堂演奏会楽譜による練習会を実施し好評である。『仏教音楽』「ないおん」『大乗』「保育資料』等に寄稿。現在、東九州短期大学助教授。



CD・カセット紹介 — 『日々(にちにち)のうた 念仏』発売!

2005年1月、仏音研編集・制作によるCD・カセットテープ『日々(にちにち)のうた 念仏』が、定価2.100円(消費税込)で本願寺出版社より発売になりました。これらには、派内において愛唱されてきた仏教讃歌を新たな編曲・演奏で収録するとともに、新曲の《念仏》、子ども向けの愛唱歌《風に向かって》、ピアノソロ曲《N-amo...》を収録しています。



《念仏》は、「お念仏がわき出て くるような曲」というテーマに、

「いつでもどこでも誰でも歌える」をコンセプトとして創作され新曲であり、



親鸞聖人750回大遠忌法 要に向け、誰もが親しな親しずさめることが親仏よ教 う返し歌われ、借いまではいた仏教 う返し歌われ、僧はられ、信はのみかにのみない方はのみないでした。 まだ仏教讃なにはのみないでは、 とのない方ははでないたはもしていただきたいとでいただきたいよう。

- *収録曲=《念仏》《真宗宗歌》《しんらんさま》《アソカの園》《いつか私は》 《み仏にいだかれて》《報恩講のうた》《旅ゆくしんらん》 《恩徳讃》《Namo...》《風にむかって》
- *CD=HONG0402 カセットテープ=HONG0403
- *購入お申込み:本願寺出版社 電話075-371-4171

書評 ―― 『真宗儀礼の今昔(いまむかし)』

净土真宗教学研究所儀礼論研究特設部会編 永田文昌堂発行 定価 3,150円(消費税込)

仏教儀礼といえば、葬儀の作法などハウツー本が多く、詳細な研究書の少ないジャンルです。そのなかで、蓮如上人500回遠忌法要を記念して出版された本書は、本願寺の歴史に沿ってその儀礼をとりあげた研究書として高く評価できるものです。



研究内容も、現代および歴史的な儀礼の様態を紹介するだけにとどまらず、またその成立背景を、教義面からのみ意味付けしようとするものでもありません。そこには、多くの門信徒とともにあった浄土真宗特有の歴史的ダイナミズムに沿って、現場記録から儀礼を読み解き、その歴史的な意義を明らかにしようとする姿勢が窺われます。その上で執筆者陣が展開する、今後の儀礼に関する展望論は、非常に示唆に富んだものとなっています。

また本書は、単なる研究書として文字を読むだけでなく、図版や写真が多数挿入されており、視覚的にも楽しめるものとなっています。浄土真宗の門信徒をはじめ、広く仏教儀礼の入門書としてもお勧めの1冊です。

演奏家・団体の活動情報の募集

本紙「交流のページ」では、皆さんの仏教音楽活動に関する情報をお知らせしていきたいと思います。「へぇ〜、この団体、こんな活動しているんだぁ」「こんな演奏会あるんだ、行ってみたいね」などなど、より多くの仏教音楽活動にふれていただければと考えています。

さらに仏教音楽の範囲を拡大して、「仏教芸能」「節談説教」「声明」「法要・儀礼」などにも注目していきたいと考えています。仏音研まで、皆さんの活動をどしどしお寄せください。

投稿募集 — エッセイ/詩/ご意見・ご要望

本紙は「仏教音楽」に関わるすべての皆さんの情報紙です。「仏教讃歌」に 対する想い出、お味わいなどのエッセイや、創作詩なども募集しています。 また、仏音研に対するご意見・ご要望などについてもお気軽にお寄せくださ い。今後の活動の参考にさせていただくほか、企画・立案に役立てていきた いと考えています。

資料提供のおねがい ―― 楽譜や資料を探しています

仏音研では、仏教音楽と仏教儀礼に関する専門ライブラリーの構築をめざし、関連資料の収集を進めています。現在までに、仏教音楽に関しては、約1200曲分の楽譜や約300点の演奏会パンフレットなどを収蔵しておりますが、全国各地で行われています演奏会や法要の数に比べれば、まだまだごく一部が集まったにすぎません。

ライブラリーの構築は、皆さまのご協力なくしては成しえません。演奏会や法要の告知やパンフレット、記念に出版された声明集や楽譜集、CD、ビデオなど、ご提供いただけます資料がありましたら仏音研までご連絡くださいますよう、是非ともご協力のほど、よろしくお願いいたします。

また、法要や声明、さらに説教や民俗芸能に関する資料についても収集・研究をすすめて参りたいと考えていますので、ご協力をお願いいたします。 なおご提供いただきました資料につきましては、研究資料として、現在構築中のライブラリーにて保存管理の上、活用させていただく予定です。

リニューアルに関して ―― 購読に関するお知らせ

機関誌『佛教音楽』は、ニューズレターへのリニューアルを機に、年4回発行の季刊紙となります。また、2005年4月の創刊号よりこのニューズレターは、組事務所経由で全寺院へと配布させていただくことになりました。これに伴い、各届出団体様宛への送付は原則として廃止させていただき、所属寺院にて閲覧いただくことになりました。これは「仏教音楽は寺院活動の一環である」という位置づけから、各所属寺院経由で本紙をお届けしようとするためです。

しかし、本紙をできる限り多くの方々に読んでいただきたいと考えておりますので、とくに各届出団体単位で購読を希望される方は、仏音研までお問いあわせください。

編集後記

ようやく創刊準備号をお届けることができた・・・そんな思いです。一昨年4月の機構改革を機に、機関誌『佛教音楽』を、親しみやすく読んで楽しいニューズレターにリニューアルしよう、という編集方針で取り組んで参りました。

まずは発行元の「勤式・仏教音楽研究所」が、どう変わった(変わろうとしている)か、感じていただければ幸いです。

そして、次回の創刊号からは、読者の皆さんに紙面を飾っていただきたいと思いますので、どしどし活動予定や「こんな活動しているよ!」というお便りをお寄せください。最後の編集後記まで、お願い三昧となってしまいましたが、「みんなのニューズレター」をめざしてガンバって参りますので、どうぞよろしくお願いします!(編集長)

『佛教音楽 ニューズレター』 創刊準備号

編集・発行 浄土真宗本願寺派 教学伝道研究センター 勤式・仏教音楽研究所

〒600-8399 京都市下京区堀川通正面下ル TEL.075 (371) 9244 FAX.075 (371) 5761

2005 (平成17)年3月1日

発 行 日 2005(平 編 集 長 福本 康之 デザイン 前田 正樹 頒 価 無料